

【添付資料】出演者プロフィール

山崎育三郎



2007年にミュージカル「レ・ミゼラブル」のマリウス役に抜擢されたのをはじめ、甘く気品のある歌声と抜群の演技力で数々のミュージカル作品に出演。新演出版「ファインディング・ネバーランド」主演バリ役や、日本初上陸の「トッツィー」主演マイケル・ドーシー&ドロシー・マイケルズ役を演じた。

今年2月からはミュージカル「昭和元禄落語心中」に主演遊楽亭助六役で出演を控えている。

アーティストとしては、カバーアルバム「1936 ～your songs～」が第58回日本レコード大賞企画賞を受賞。

ドラマ「下町ロケット」(TBS系)、連続テレビ小説「エール」(NHK)、大河ドラマ「青天を衝け」(NHK)、「ザ・トラベルナース」(EX系)などに出演。トークバラエティ番組「おしゃれクリップ」(NTV系)では番組MCも務めている。

ミュージカルだけに留まらず、多彩な才能を発揮し多方面に活躍の場を広げ続けている。

宗本康兵（音楽監修・ピアノ）



3歳の時にクラシックピアノと出会い、音楽の道へ。

幅広いジャンルの音楽に精通し、アーティストやユーザーに寄り添った音を第一に考え、作曲、編曲、コンサート、テレビドラマやアニメーションの映像音楽など多岐に渡り活躍中。

プロデュースや作編曲したアーティストは、Uru、華原朋美、川嶋あい、Kinki Kids、DISH//、中島美嘉、中森明菜、ポルノグラフィティ、南野陽子、WANIMA など多彩な顔ぶれとなっている。

近年では、山崎育三郎を始め、ももいろクローバーZほか多くのバンドマスターも務めている。

田中祐子（指揮）



東京藝術大学大学院指揮科修士課程首席修了。パリ・エコールノルマル音楽院オーケストラ指揮科高等ディプロム課程修了。東京国際コンクール「指揮」入選、ブザンソン国際指揮者コンクールセミファイナリスト。2013年クロアチア国立歌劇場リエカ管弦楽団に招かれ海外デビュー。NHK交響楽団をはじめ全国各地のオーケストラと共演。2015年藤原歌劇団「椿姫」でオペラデビュー。数々の公演に招かれ、21年の池辺晋一郎「千姫」(世界初演)は第19回三菱UFJ信託音楽賞奨励賞受賞。23年、藤原歌劇団「二人のフォスカリ」、24年2月、倉本聰原作、渡辺俊幸作曲「ニングル」(世界初演)とオペラ指揮者としても着実に実績を挙げている。

平成30年度(第29回)五島記念文化賞オペラ新人賞受賞。

2020/21年度ロームミュージックファンデーション奨学生。

2018年4月-2020年8月、オーケストラ・アンサンブル金沢指揮者。

NHK-Eテレ「クラシック音楽館」やNHK-FM「名曲アルバム」、テレ朝「題名のない音楽会」等、メディア出演多数。(2024年12月)

栗田博文（指揮）



1988年、第23回東京国際音楽コンクール指揮部門において第1位優勝を果たし、翌年、国内主要オーケストラを指揮しデビュー。1989年に渡欧。同年、第1回アントニオ・ペドロッチ国際指揮者コンクール（イタリア）に入賞し国際的な評価を確立。1995年、第1回シベリウス国際指揮者コンクール（フィンランド）の最高位に輝く。同年、フィンランド放送交響楽団より招かれ、ヨーロッパデビューを果たし大好評を博す。国内外の活発な指揮活動とともに、国立音楽大学客員教授を務め、後進の指導にも力を注いでいる。クラシック音楽の古典から現代作品まで、幅広いレパートリーを持つほか、様々なジャンルとのコラボレーションも積極的に行っている。

山下康介（編曲監修）



1974年、静岡県生まれ。東京音楽大学作曲専攻卒業。

映画「海辺の映画館～キネマの玉手箱」「花筐／HANAGATAMI」「その日のまえに」などの大林宣彦監督作品に多く携わるほか、NHK連続テレビ小説「瞳」やドラマ「花より男子」、アニメ「ちはやふる」、「ドラゴンボール DAIMA」、特撮作品「暴太郎戦隊ドンブラザーズ」、「仮面ライダーセイバー」、歴史シミュレーションゲーム「信長の野望シリーズ」などの音楽がある。

また、「題名のない音楽会」（テレビ朝日系）などにおいて多くの編曲を手掛けているほか、宮本亜門氏演出のミュージカル「太平洋序曲」「スウィーニー・トッド」などで公演音楽監督を務めている。

現在、洗足学園音楽大学教授、東京音楽大学客員教授。一般社団法人日本作編曲家協会（JCAA）理事。

©Shinsuke Yamamoto

東京フィルハーモニー交響楽団

1911年創立。日本で最も長い歴史をもち、メンバー約160名、シンフォニーオーケストラと劇場オーケストラの両機能を併せもつ。名誉音楽監督チョン・ミョンフン、首席指揮者アンドレア・バッティストーニ、特別客演指揮者ミハイル・プレトニョフ。定期演奏会や「午後のコンサート」、オペラ・バレエ演奏、NHK他における放送演奏の他、各地での訪問コンサートや海外公演も積極的に行い、国内外から高い評価と注目を集めている。国民的番組「NHK紅白歌合戦」「クラシックTV」のほか2020～21年には「情熱大陸」「BS1スペシャル」などのドキュメンタリー番組にも登場。1989年よりBunkamuraオーチャードホールとフランチャイズ契約を締結。文京区、千葉市、軽井沢町、長岡市と事業提携を結び、各地域との教育的・創造的な文化交流を行っている。

公式Webサイト：<https://www.tpo.or.jp/>

大阪交響楽団

1980年「大阪シンフォニカー」として創立。創設者である、永久名誉楽団代表・敷島博子が『聴くものも、演奏するものも満足できる音楽を！』を提唱。いつも聴衆を“熱く”感動させるその演奏は、「魂の叫び」「情熱の音」と評されている。

2001年1月に、楽団名を「大阪シンフォニカー交響楽団」に、2010年4月「大阪交響楽団」に改称した。2022年4月、新指揮者体制として、山下一史（常任指揮者）、柴田真郁（ミュージックパートナー）、高橋直史（首席客演指揮者）の3名が就任、さらなる楽団の飛躍が期待されている。

2006年4月、大和ハウス工業株式会社 代表取締役会長／CEO（当時）樋口武男氏が運営理事長を経て、2018年11月公益社団法人大阪交響楽団理事長に就任。2020年10月に大和ハウス工業株式会社 代表取締役社長／CEO 芳井敬一氏に理事長をバトンタッチした。公式Webサイト：<https://sym.jp>

中部フィルハーモニー交響楽団

2000年小牧市交響楽団として設立。2007年中部フィルハーモニー交響楽団へ改称。愛知県小牧市を拠点に「地域に根差したトップクラスのオーケストラ」を目指して、主に中部圏で精力的に演奏活動を行っている。

定期演奏会においては古典から近代まで幅広く、作曲家ツィクルスや新作の初演を行うなど挑戦的でバラエティに富んだ企画と併せて、アンサンブル技術や情熱的な演奏で高い評価を得ている。また、演奏はナクソス・ミュージック・ライブラリーや各音楽配信サービスにて聴くことができる。

これまでに愛知県芸術文化選奨新人賞などを受賞し、「多年にわたる地方自治の発展への功績」に対し愛知県より感謝状を授与された。2024年6月、日本オーケストラ連盟の正会員に昇格。現在、秋山和慶が芸術監督・首席指揮者、飯森範親が首席客演指揮者、竹本泰蔵が Chubu フィルム・サウンズ・オーケストラ指揮者を務める。(2024年12月現在)

公式 Web サイト：<https://chubu-phil.com>

札幌交響楽団

1961年発足。北海道唯一のプロ・オーケストラとして「札幌」の愛称で親しまれ、雄大な北海道にふさわしい透明感のあるサウンドとパワフルな表現力で広く人気を集めている。

歴代指揮者は名誉創立指揮者の荒谷正雄、ペーター・シュヴァルツ、岩城宏之、秋山和慶、尾高忠明、マックス・ポンマー、ラドミル・エリシュカ、マティアス・バーメルトなどが務めた。現在は首席指揮者 エリアス・グランディ、名誉音楽監督 尾高忠明、友情指揮者 広上淳一、首席客演指揮者 下野竜也、正指揮者 川瀬賢太郎を擁し、北海道を拠点に世界に発信するオーケストラとしてますますの充実を目指す。

年間約120回のオーケストラ・コンサートを行うほか、積極的に地域活動に参加し、小編成での教育福祉活動を北海道全域で展開している。60余年の歴史の中では50周年のヨーロッパツアーなど節目ごとに海外公演を行い、これまでにアメリカ、英国、ドイツ、イタリア、東南アジア、韓国、台湾を訪問、各地で好評を博した。

岡山フィルハーモニック管弦楽団

1991年に開館した岡山シンフォニーホールは、国内外のアーティストから音響の素晴らしいホールとして高い評価を獲得。これを機に文化庁の補助を受けて、岡山にゆかりのあるメンバーを中心に優れた演奏者で構成された岡山県初のプロオーケストラ、岡山フィルハーモニック管弦楽団が1992年に創設。以来、世界の著名な指揮者・ソリストを迎えて開催する定期演奏会をはじめ、若い演奏家の育成事業、青少年の情操教育に資する事業、子育て支援や地元演奏団体との共演等、地域における音楽芸術振興の中心的役割を担っており、公演回数は年間100回を超えている。

また、2013年には岡フィル初の首席指揮者としてハンスイェルク・シェレンベルガーが就任し岡フィル強化に取り組んできた。2022年度からは秋山和慶がミュージック・アドヴァイザーに就任、一層の飛躍を図る。(2024年12月現在)

平成12年第1回岡山芸術文化賞グランプリ受賞。平成15年第4回福武文化奨励賞受賞。

平成16年第1回マルセン文化賞受賞。平成21年度岡山県教育関係功労者表彰。

平成24年山陽新聞奨励賞受賞。